イチゴの単収向上に向けた技術改善支援

１　普及活動のねらい

イチゴ農家は、各戸で様々な課題を持っており、それらの課題をクリアすることにより、単収向上を目指している。これまでに、ｐＦ センサーを活用したかん水管理の改善（４戸）、育苗時の施肥管理の改善（４戸）、天敵活用によるアザミウマ類の防除（２戸）、高設栽培給液管理の改善（４戸）、新品種の検討（１戸）、育苗期及び定植後の病害虫（炭疽病、ハダニ類）の防除対策（２戸）などの取組を支援した。本年度は、単収の向上に向け、育苗期の炭疽病対策や近年問題となっている高温対策に取り組む４戸の農家を支援した。

２　普及活動の成果

各４農家は単収向上に向けた技術改善に取り組めた。Ａ農家は、本ぽでの高温対策として、定植後の安定した花芽分化には高温対策が重要であると理解し、遮光を実施した。結果、収穫開始時期に大きな違いはなかったものの、人の作業負担の軽減につながった。Ｂ農家は、育苗期の炭疽病対策として、炭疽病を防除するためには様々な対策の積み重ねが重要であると理解し、週単位の薬剤散布や雨よけ等が実施された。結果、育苗期も炭疽病の発生はなく、定植後も炭疽病による植え替えも必要なく、年内収量を十分に確保できた。Ｃ農家及びＤ農家は、育苗時の安定した花芽分化には高温対策が重要であると理解し、固化培地の効果を確認した。コスト面やかん水管理に課題はあったものの、花芽分化は早く、そしてばらつきも小さかったため、高温対策としては有効な資材であると思われた。

３　普及活動の内容

個別巡回時に聞き取りで振り返りを行い、改善策について提案を行った。炭疽病対策には、ビニルの展張を促すとともに、治療剤の活用や週単位での防除を促した。高温対策には、本ぽへの遮光やビニル張りの遅延を提案したり、固化培地の活用を提案した。取組の実施後は、効果の検討支援も行い、今後の管理の改善につなげた。



写真　固化培地（左）の資材比較

重点課題名	３　スマート農業技術の活用による野菜産地の育成
普及事項名	（４）イチゴにおける個別課題解決の推進